共産党日記

『かさこ地蔵』によって自民党を斬る

美和　勇夫

自民党機関紙「自由新報」が「偏向教科書キャンペーン」と、めいうって、小学校一、二年生の国語の教科書に対してまでまとはずれの攻撃を加えている。自民党が「貧乏くさくていかん」と述べている。「かさこ地ぞう」を要約してみよう。

☆　☆　☆

昔々、貧乏でその日暮らしの、じいさまとばあさまが新年を迎える、というのに、「もち」も買えない。そこでふたりしてせっせと「すげのかさ」をあんで、じいさまがそれを大みそかの町へ売りに出かけることにしました。

しかし、町では、「うす」や「きね」「おかざりの松」は売れるが、だれも「すげのかさ」など買ってはくれない。「ばあさまがさぞがっかりするだろう」と思いながらも、日暮れた村へじいさまが、とんぼり、とんぼり帰ると、ひどいふぶきになり、地ぞう様が六人、ふきっさらしの野っぱらに寒そうに立っておいでになりました。

そこで、じいさまがかわいそうに思って、もっていた「すげのかさ」を地ぞう様にかぶせてあげました。

★　★　★

家に帰って、ばあさまにこのことを話すと、ばあさまは、いやな顔もせず「それはよいことをしなすった」といって喜こんでくれました。

二人が、とうとう今年は、「もちこ」なしの年だといってねむりにつくと、真夜中に「じょいさや、じょいさや」と、そりを引くかけ声と、「かさことってかぶせた、じさまの家はどこだ」という歌がきこえます。

おどろいて二人が外へ出てみると、のき下に「もち」や「ごんぼ」や「松かざり」がどっさりおいてあり、地ぞう様が「そり」を引いて帰ってゆくところでした。

おかげで、じいさまとばあさまは、よいお正月を迎えることができましたと。

★　★　★

この「かさ地蔵」は福島県の民話だそうだが、童話作家の岩崎京子が、全く見事な筆さばきで、小学生向きの名文章にしたためている。

映画評論家の「淀川」おじさまや、「小森」のおばさま、ならずとも「いいですねえ、すばらしいお話ですねえ……」というほどの秀作である「こういう作品が文部省の検定になぜ合格したのか絶望的な気持におそわれざるをえない」と述べている、自民党は、いったい、どういうおくらし（生活）をなさっているのか。

それほど、気にいらんというのであれば、自分達で「気にいる教科書」というしろものを作ってみたらどうか。

「困っている人がいたらその人の身になって親切に善行を尽くしなさい」

「精いっぱい努力してむくわれなくとも、いつかその実がみのることもあります」

……

この話は、まさに現代の世の中に欠けている「人倫の大本」（人としての根本の道）、自民党こそが主張する修身の根本でっせ。

ありあまる「物」に囲まれて、言いたいほうだい食いたいほうだいの生活をしている今の「クソガキ」どもにこの精神を教えるのは至難のわざである。幸い、この話だけは文章の達意さもあって子供達が喜こんで読んでおるというではないか。

★　★　★

「教科書批判」といい「日教組批判」といい、なにかというと「君が代をもちだす、自民党の主張はワンパターン、単細胞そのもので全く勉強不足もいいところである

自民党は「となりの女がブスだからしかたなしにこの女でがまんする」といった支持層もあることをよくよくわきまえることだ。

この話を「きわめて暗い偏向した貧乏物語だ」などというのは、思いあがりもはなはだしい。

日本の国力がこれほどになったのは自民党の力というより、貧しかった日本国民の精進努力のたまものではないか。

時には三〇年前の、手前の生活をしみじみとふりかえって人様にモノを言ってほしいですなあ。